

Social Capital and Support for Populist Radical Right Parties: A Multilevel Analysis of Household Panel in the U.K.

研究背景

➤ポピュリズムの横行：

ポピュリスト急進右翼政党（PRRPs）は現在、ヨーロッパ諸国の3分の1において上位3位以内に入り、現代ヨーロッパ政治における主要なアクターとなっている。

先行研究

➤急速に拡大しているポピュリズムの需要側の研究：

- ・文化不満
(Becker and Fetzer 2016; Dustmann and Preston 2007; Dustmann et al. 2019; Halla et al. 2017; Inglehart 1977, 1989; Inglehart and Norris 2016, 2017, 2019; Mendez and Cutillas 2014)
- ・経済不満
(Anelli et al. 2019; Burgoon et al. 2018; Frey et al. 2018; Funke et al. 2016; Funke and Trebesch 2017; O’Connor 2017; Pástor and Veronesi 2021; Roupakias and Chletsos 2020; Scheve and Slaughter 2001)
- ・経済と文化の相互作用
(Colantone and Stanig 2018a, 2018b, 2019; Gidron and Hall 2017, 2020)

➤市民社会の関心は？

市民の需要や不満に焦点を当てている需要側の研究は、市民社会の役割には焦点を当てていない。
→
社会関係資本の役割に言及する研究において、実証的な証拠は互いに矛盾した結果を示している。

➤実証的な矛盾

- ・社会関係資本はポピュリスト急進右翼政党への支持に**マイナス**の影響を与える。
(Algan et al. 2017; Berning and Ziller 2017; Boeri et al. 2021; Fieschi and Heywood 2004; Giuliano and Wacziarg 2020; Jesuit, Paradowski, and Mahler 2009; Koivula, Saarinen, and Räsänen 2017; Lynch et al. 2022; Rodríguez-Pose, Lee, and Lipp 2021; Xia 2021)
- ・社会関係資本はポピュリスト急進右翼政党への支持に**プラス**の影響を与える。
(Foertsch and Roesel 2023; Popescu and Jugl 2024; Satyanath, Voigtländer, and Voth 2017)

データと変数の操作化

➤分析対象：英国独立党（最後の頑健性チェック：UKIP、保守党、労働党支持を明確に区別）

➤データ：

個人レベル：イギリス家計調査データ：Understanding Society（Wave 6：2014-2015）.
地域レベル：2001年・2011年の国勢調査に基づき作成。スコットランドおよびウェールズを除くイングランドの326地域を分析対象とする。

➤独立変数：

- ・結合型：人種的同質性、経済的同質性、特定の信頼（個人レベル）
- ・橋渡し型：パットナム型の市民団体参加、ボランティア活動、慈善活動（個人レベル）
- ・連結型：政治参加、制度の応答性の認識、政治的影響力の認識（個人レベル）

➤文化要因・経済要因・コントロール変数：

- ・個人志向の経済的不安（egotropic）：所得満足度（個人レベル）
- ・社会志向の経済的不安（sociotropic）：2001年・2011年国勢調査に基づく地域の雇用状況の10年間の変化（地域レベル）
- ・社会志向の文化的不安（sociotropic）：同じく国勢調査に基づく地域の民族的多様性の10年間の変化（地域レベル）
- ・人口統計学変数：人種、性別、年齢、学歴（個人レベル）

理論：社会関係資本(Social capital)

➤定義の変遷とPutnamの影響

- 社会関係資本の定義は多様
→ 特に影響力のある3名：Bourdieu、Coleman、Putnam
- Putnam（1993）の定義（政治学での主流）：
「信頼・規範・ネットワークなどの社会組織の特徴により、協調的行動を促し、社会の効率性を高めるもの」
- ただし、ネットワーク内の排他性や弊害への懸念も
→ Gittell & Vidal（1998）がPutnamの包括的定義を批判

➤ 3類型モデルの形成

- Putnam（Granovetterの弱い／強い紐帯に着想）
→ 社会関係資本を以下の**2類型**に区分：
 - － ◆ **結合型（Bonding）**：
同質的な成員間の密接な信頼・協力（例：家族・親しい友人）
 - － ◆ **橋渡し型（Bridging）**：
異質な背景をもつ他者との尊重と連携（例：市民団体・組織）
- Szreter & Woolcock（2004）によりさらに1類型追加：
 - － ◆ **連結型（Linking）**：
制度的な権力格差を超えた関係性（例：行政・公的機関との接触/信頼）
- ✅ 現在の標準モデル：**Bonding／Bridging／Linking の三類型**

社会関係資本の次元と連結型の位置づけ

- Bonding（第1次元）・同質的集団内の閉鎖的な水平的関係・内部の連帯を強化
- Bridging（第2次元）・異質な集団をつなぐ開放的な水平的関係・社会的亀裂を超えて連結
- Linking（第3次元）・個人と制度を結ぶ開放的な垂直の関係・制度信頼の基盤
- 第4次元の可能性：閉鎖的垂直関係・クライエンテリズムや縁故主義（Szreter & Woolcock 2004）・ただし個人レベルにおける社会調査での測定は未発達（Muno 2010）

因子分析結果： プロマックス回転後

Variable	Factor 1	Factor 2	Factor 3
Racial homogeneity	0.002	0.104	0.638
Economic homogeneity	0.060	-0.320	0.632
Particularized trust	0.018	0.171	0.483
Putnam-type association	-0.048	0.788	0.032
Volunteer activity	-0.041	0.835	-0.104
Charitable activity	0.036	0.432	0.293
Political participation	0.378	0.231	-0.195
Perceived responsiveness	0.900	-0.058	0.047
Political influence	0.909	-0.035	0.020
Eigenvalues	2.128	1.390	1.113
Variance	1.860	1.794	1.216
Cumulative	0.237	0.391	0.515
KMO			0.576
Bartlett’s test			***

結果報告

モデル1（ランダム切片）・モデル 2（ランダム係数）：基礎モデル（個人レベル変数）

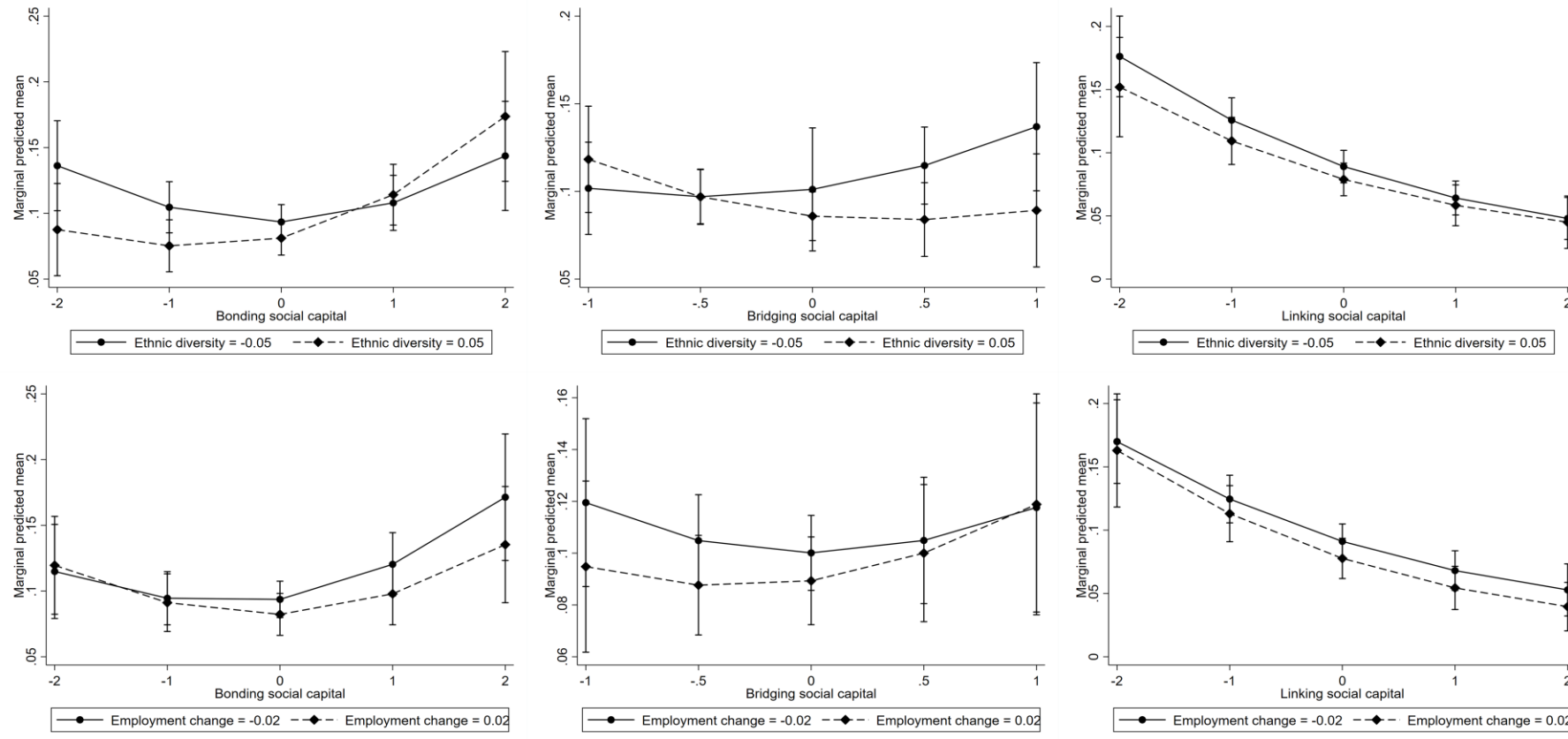
	Model 1	Model 2
Bonding social capital	0.071 (0.065)	0.095 (0.079)
Bridging social capital	0.029 (0.112)	-0.017 (0.140)
Linking social capital	-0.397*** (0.050)	-0.390*** (0.061)
.....		
ICC	0.112	0.117
AIC	4668.604	4622.394
Observations	7680	7680

Standard errors in parentheses

* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$

結果報告

モデル5・6：地域レベル変数および交差項を含むランダム切片・係数モデル（従属変数：UKIP支持、白人回答者に限定）



➤貢献：

- ・社会関係資本を**結合型・橋渡し型・連結型**の三類型に分解する必要性（先行研究の統合、実証結果が一貫しない理由に対する理論的説明枠組みを提示する）
- ・方法論的には、マルチレベル分析により、個人レベルの社会関係資本と地域・文脈レベルの経済的・文化的要因を同時に分析し、三類型の社会関係資本がそれぞれ異なる水準の条件とどのように相互作用するかを検証可能である。